

# フルベッキ召天100年記念講演会報告

中山 弘正

記念館に事務局を置く「明治学院歴史資料館」がスタートして2年。こことキリスト教研究所の主催で、1998年11月21日（土）「フルベッキ没後100年記念講演会」が開催された。資料館館長・阿満利歴氏の挨拶の後、先ず、大橋昭夫氏（静岡で弁護士、『明治維新とあるお雇い外国人——フルベッキの生涯』の著者）「フルベッキと近代日本」があり、フルベッキの生家、モラヴィアン兄弟団の学校での教育、オランダ改革派の影響から始まり、アメリカでの青年時代が詳しく語られた。オーバーン神学校への入学とS.R.ブラウンとの出会いに至る職歴も興味深い。次いで「フルベッキの日本行き」のこととして日米修好通商条約（1858年）などが話され、「長崎における教育」が済美館（長崎洋学所）での英語教育、致遠館での大隈重信、副島種臣ら「きらびやかな教え子たち」との出会いとその教育内容に移った。幕末・明治の日本からの留学生派遣におけるフルベッキの功績と明治新政府下での教育面での働き（開成学校、大学南校等）と、さらに岩倉使節団をめぐる彼の働きが明らかにされた。（この点、私自身も、例えばキリシタン禁制高札撤去に関してのフルベッキの貢献を改めて認識した次第である。『フルベッキ書簡集』も参照）

大橋氏は弁護士であられることで特に法律面に明るい方であることは当然であるが、「日本法制におけるフルベッキの貢献」が強調されたことは当然であろう。フランス刑法等の翻訳、国憲第1次草案への関与の他、大橋氏は国立公文書館等に残存するフルベッキの業績、として、ドイツ連邦及び各国刑法比較、コードナポレオン附録目次、アメリカ合衆国特許法、アメリカ合衆国著作権法、フランス森林法、等々12も指摘された。

最後の項目として「宣教師としてのフルベッキ」が立てられていたが、時間の関係もありほとんど省略されざるを得なかったが、「日本の実状にあわせた伝道」「神とともに歩むが走らない人」といった表現がフルベッキ師の性格を示しているように思われた。

大橋氏の講演はフルベッキについてかなり全面的なもので、かつ密度も濃いものであった。

次いで、山本季司氏「フルベッキと使命観」の講演があった。山本氏は、長年三井造船にお勤めになった方だが、三井の団琢磨とMITのことからフルベッキに関心をもたれた方で、私に1998年がフルベッキ召天100年であることを教えて下さった方である。

山本氏は、現在の日本の状況が、外圧のこと、財政困窮のこと、政治の貧困などの点で幕末のそれと酷似していることを先ず指摘され、フルベッキはそうした閉塞状況を突破しようとする当時の下級武士や民間人に「光を与え、目標を与えた」のではないかと指摘され

た。

他の宣教師にも或る程度共通であったが、フルベッキ師は若く（20歳台から）、人格徳性に優れ、語学力に恵まれ、強い使命観をもっていた。山本氏は、この講演ではその使命観を強調され、私ども教育の世界に居る者に、幕末的狀況下の今の若者に光を与え目標を与える教育（改革）をなすことを強く迫られたといえよう。

会は約40名の参加であったが、W. E. Griffis の Verbeck of Japan (1900) を翻訳中の佐々木晃氏をはじめ、宣教師についての研究者もかなり参加しておられ、大変有益な集まりとなった。事務局の石井さん、岡村さんにも深く感謝したい。

（なかやま ひろまさ

所員・経済学部教授）



フルベッキ博士記念碑（明治学院構内）